

● 制作

再開する海陸

～幕張・豊砂海岸のリデザインによる固有風景の創出～

小室 虎太郎

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 武田 史朗)

KOMURO Kotaro

1. 研究の背景と目的

千葉県千葉市の美浜区は埋立地上に広がる比較的新しい市街地である。オフィスビルや複合商業施設、大型のイベント施設等、スケールの大きい構造物が幅広の道に割られた街区に置かれ、空間を特徴づける。上述した幕張新都心に存在する数々の施設は、皆その利用目的によって集客し、訪問した人々から収益を得る。また、人々が実際に来ることでまちのにぎわいが保たれている。裏を返せば、人が施設に来なくては成り立たないまちであるといえる。

2020 年に日本でも流行した COVID-19 は、私達の生活様式を変化させた。テレワークの推進、またデジタル化や XR 技術の進歩により、将来的に買い物やイベントは現地に行かなくとも技術的には可能になるであろう。この流れは、大きな施設に行き、多人数で集まる必要がないという方向へ人々の考え方を変化させる。このとき、施設に人が来ることで成り立っている幕張新都心は急速に価値を失うこととなり、それは防ぐべきことであると考え。

したがって本研究では、施設に頼らず土地自体に人々が価値を見出し、足を運ぶようなランドスケープ、すなわち「固有風景」を創出し、美浜区に新たな価値付けを行う提案を行う。

2. 方法

千葉県美浜区豊砂から美浜の、現幕張メッセ駐車場から海浜幕張公園 G ブロック、建て替えまたは改修が検討されている ZOZO マリンスタジアム周辺までの一体を対象地とし、文献調査と現地調査により、現状の課題や土地の歴史、生物等を網羅的に把握した。調査結果より、固有風景を創出するために利用可能な要素を抽出し、それらについて追加で調査を行い提案の基礎とした。

3. 調査結果

(1) 人間と生物の関わり

埋め立て前、美浜区を含む東京湾内の多くの場所で、広大な干潟が広がっていた。干潟は底生生物や魚類、それらを餌とする鳥類等を育んだ。その恩恵は漁獲として人間も受け、特に貝類の漁獲が盛んであり、1935 年頃にはアサリが最大 6～70,000 トン、ハマグリは 8,000 トンにも達した¹⁾。

(2) 埋め立て前後の生物相

埋め立て前である 1971 年、本提案対象地に含まれる浜田

川河口付近において底生生物の調査が行われた。

表 1 埋め立て前の幕張干潟に見られた底生生物²⁾

岸近く	アサリ, ホトトギスガイ, オキシジミ, ハナモグリ ヒメシラトリ, ユウシオガイ, ウミゴマツボ
河口岸寄り	チコガニ, ヤマトオサガニ
沖側	ミドリイソギンチャク, ユウシオガイ, ハマグリ オキシジミ, ハナグモリ, ヒメシラトリ, オサガニ

これらの生物は、塩分濃度や干出時間、底質等の環境に適応しており、多様な環境はそのまま多様な生物種の存在を可能にしていたと考えられる。また、かつての海から陸にかけての連続的な変化を残す千葉県木更津市の小櫃川河口干潟、盤州干潟においても、多様な生物種が見られる。

一方、埋め立て後は陸と海が護岸によって隔てられ、単一的な環境が残った。千葉市には人口海浜が設けられたものの、そこに生息する生物は種数、量ともに非常に貧困であった。それは一般的な干潟と比較して潮間帯の斜面が急（盤州干潟 1:800 に対し、幕張人工海浜 1:20～30³⁾）であり、底質の流出が起こること、また、東京湾の富栄養化や埋め立てのための浚渫地の影響により毎年のように発生する青潮が影響していると考えられている。¹⁾

以上より、本地域には本来、自然生物という固有の魅力を持つもの、埋め立てによって人間自らその恩恵を受けられない状態にしていることが明らかになった。現状、生物が多くすむ海と、人々が生活する陸は、隣り合いながらも背を向けている状態と言える。

4. デザインの方向性

調査によって明らかになった固有の魅力である生物に着目し、海と陸を再度連続させることで干潟を中心としつつ多様な環境をつくり出す。また、人間の活動場を織り込み、人と生物の活動が交差するような風景を生み出す。

参考・引用文献

1) 沼田眞, 風呂田利夫 (1997) 「東京湾シリーズ 東京湾の生物誌」. 築地書館株式会社出版. 418p.

2) 千葉県史料研究財団編集 (2004) 「千葉県の自然誌 本編 8」. 千葉県. p. 632

3) 宇田高明, 堀越信雄, 林順一 (1994) 「入り組んだ湾奥部での人工海浜計画上の留意点—東京湾を例として—」. 『海洋工学論文集』. 41 巻. pp. 591-595.

